

埼玉県下の廻り地蔵

—その地域的展開—

松  
崎  
憲  
三

## はじめに

「めぐり」とかかわる民俗事象には多様なものがある。そのうち民俗信仰とかかわるものを、筆者は「めぐり」のフォークロアと称している。すなわち、さまざまな神仏や神面・経典等々の神(祭)具・仏具等を奉持して、集落内の家々や集落の範囲を越えて広範な地域を「めぐる(巡る、廻る、回る)」習俗にほかならない。筆者は先に埼玉県下のお獅子様(獅子回し)を取り上げたが、小稿はそれに続くものである。なお、廻り地蔵とは地蔵尊像(仏像あるいは絵像)を背負い厨子や手提げ厨子、箱等に納めて、各家々や講宿等を順次廻し祀る行事にほかならない。安産祈願・子育て祈願のほか、疫病除け等を目的として行われるものである。巡行地蔵と称することもある。

三田村佳子は埼玉県下の「めぐり」のフォークロアについて、「大きくみて起点と終点があり、一定期間に素早く各戸を廻り村境で災厄を祓うものと、一定の範囲を永遠に廻り続けるものがあるが、実際にはその中間形態も多い」としつつ、前者の代表例にはお獅子様・百万遍・大般若等があり、両者の形態を含むものとして、廻り地蔵・廻り不動等があげられるとしている。<sup>②</sup> これを受ける形で廻り地蔵について戸邊優美は、一年中廻っている形態には羽生市川俣、深谷市国済寺の廻り地蔵などがあり、地域の中を廻り続けているが縁日に地蔵が檀那寺へ戻る決まりになっていることが多いと指摘している。さらに特定の期間に起点から終点を巡る形態のものとしては、熊谷市今井や本庄市北堀の廻り地蔵などがあり、こちらは縁日に檀那寺を出発し、決まった地域を廻っていくものとの見解を示した。<sup>③</sup>

なお、県内における廻り地蔵の分布をざっと見ると、利根川に接する県北の地域と所沢市・入間市・新座市を中心とする県南に集中し、中央部の比企郡吉見町や東松山市あたりにも散見できるといった状況である。ちなみに県南と県中央部のものには、都内や神奈川県内の寺院に拠点をおく廻り地蔵とかかわるものが目立つ。

小稿ではこうした傾向を踏まえて、県下の廻り地蔵の概要把握に努めた上で、「めぐり」の形態の相違や地域的特徴について分析を加えることにしたい。

## 一、先行研究小史

埼玉県下の廻り地蔵の存在を知る上で欠かせないのが、三好朋十の『武蔵野の地蔵尊〜武蔵野編〜』、『同〜埼玉東部／川崎・横浜市編〜』である。<sup>(4)</sup>これらの小冊子は、当該地域にある寺院の地蔵尊を取り上げて簡潔に解説を施したもので、この中に巡行地蔵が少なからず含まれているのである。地図で寺院がプロットされており、この種の調査・研究を手掛けるいわば導きの書といえる。一方、報告・研究論文に関していえば、熊谷市周辺の廻り地蔵に逸早く注目したのは大島建彦であり、同市広瀬・田福寺（臨済宗）の廻り地蔵と広瀬廊まで廻ってくる深谷市国済寺（臨済宗）のそれを取り上げている。後者については「お加持」や「おうかがい」なる習俗の存在に注目しており、興味深い。なお、同市今井の廻り地蔵については、改めて調査を試みたいとしてその存在を指摘しているに留まっている。<sup>(5)</sup>中村光次も「熊谷の巡行地蔵」なる論稿をまとめており、これも深谷市国済寺から廻ってくる地蔵について、熊谷市久保島の受け入れ習俗について報告したものである。<sup>(6)</sup>

なお、先に触れた熊谷市今井の廻り地蔵については、その後『埼玉県の祭り・行事』の中で三田村が報告しており、また三田村は、「北埼玉の地蔵祭り」の中で、深谷市国済寺や高島の廻り地蔵等についても簡単ながら言及している。<sup>(8)</sup>さらには、埼玉県立歴史と民俗の博物館による「巡る・廻りの民俗行事」の組織的調査でも熊谷市・今井の廻り地蔵が取り上げられており、内田幸彦が地蔵の由来・巡回範囲・祀り方等に分析を加えている。<sup>(9)</sup>一方、羽生市本川俣の廻り地蔵については戸邊が報告しており、地域の檀那寺・千手院（真言宗）の地蔵まつりとの関連に留意しつつ分析を試みている。<sup>(10)</sup>

これらに対して、県中央部に位置する比企郡吉見町久保田・無量寺（真言宗）の廻り地蔵を取り上げたのは榎本直樹であり、明和四年（二七六七）の「順廻地蔵一札の事」なる史料を紹介している。それによって、かつては久保田のみならず川島村（現川島町）吹塚その他にまで出向っていたことが知られる。また榎本によれば、この地蔵は廻国（六十）六部が背負っていたものという。<sup>11</sup>最後に、入間市や所沢市域を廻っていた、東京都狛江市和泉・泉龍寺（曹洞宗）の廻り地蔵についてであるが、中島恵子の研究成果を引用しながら筆者が若干言及したことがある。<sup>12</sup>これについては、後程改めて取り上げることにした。

廻り地蔵の事例数といい、調査・研究成果の質量といい、神奈川県それには及ばないからかもしれないが、埼玉県下でもわりと早くから調査がなされ、近年は県立の博物館による組織的調査も実施され、ようやくその全体像がイメージできるようになった。こうした経緯もあって、標題のテーマで取り組むことに思い至った次第である。

## 二、廻り地蔵の分布

### (1) 三好朋十の報告から

先に紹介した三好の著書は便利この上なく、筆者も『巡りのフォークロア』なる小著の中で活用させていた。三好の著書には、一〇ヶ寺の巡行地蔵が紹介されており、そのうち六ヶ寺のものが所謂廻り地蔵に相当し、あとは笠を頭上に冠した像容が巡行姿のものである。ここではその六ヶ寺の巡行地蔵（廻り地蔵）を取り上げる。

(ア)北本市北本宿・多聞寺（真言宗）

堂内に素彫り、円頂、もろ手を前にして一童子を抱いているような立高三十四センチの小体の地蔵尊を、笈の中に納めたまま安置してある。往時のいわゆる巡行地蔵の類であって、檀信徒の家々を巡行した子育て地蔵の類で

あろうか。(中略)この巡行地藏を境内の地藏堂に安置した理由は、檀信徒が巡行をやめて当寺に安置しておけば、誰でも、いつでも、任意に参詣することができると申し出て、そのうち、このようにしたものである。<sup>13)</sup>

(イ)鳩ヶ谷市浦・地藏院(真言宗)

本尊は木彫りの地藏尊で、秘仏である。(中略)光背と尊体とは一本作り、彫目、珠杖を持ち、座高六十七センチ、宮殿の中に安置され、子育巡行地藏と呼び、江戸時代に巡行したことがある。江戸以前の入仏であろう。<sup>14)</sup>

(ウ)羽生市川俣・千手院(真言宗)

寺には巡行地藏という名の木彫り地藏一尊を安置してある。安置というよりも一日だけ本堂内に安置し(八月二十三日だけ<sup>15)</sup>筆者注)、その日の夕頃には巡行してしまうという忙しい地藏尊である。(中略)伝えう。昔、一人の廻国六十六部巡礼者がいて、諸国をめくり、この川俣の村まで辿って来たが、長い旅に疲れてか、病を得て斃れてしまった。里人はこれを見て不憫に思い、地藏尊を入れた笈をそのまま千手院に置いてねんごろに供養してやった。が、現在もなお巡礼者は死者の霊にならって、地藏尊を笈厨子に入れたまま三百六十五日を巡行しているのである。尊容は円頂、珠杖を持ち、金で蒔絵し、立高四十八センチ、左右の袖は乱れて破風の姿であり、江戸中期の入仏と推定する。<sup>15)</sup>

(エ)深谷市高島・安養院(真言宗)

利根川の右岸近き旧新戒(しんがい)村の北端に、真言宗高野派の引接山(いんじょうざん)安養院がある。こゝは深谷市高島というところであつて、境内の地王堂内におへち巡行という名の石彫地藏を安置する。この地藏尊は、利根川が氾濫したときに寺前に漂着したのを、里人たちが拾いあげた尊像であつて、村人たちはこれをお厨子の中に納め、これをおついで対岸の尾島や、南岸の石塚、由良、登戸などという村々を巡行する。尊容は円頂、珠杖を持ち、立高五十二センチ、厨子の裏に大きな環がついている。厨子の引出しの内には具足や灯芯、油などを入れる。利根川が改削される以前は、寺のあるあたりは群馬県に属していた。けだしおへちとはへちマ加

持の略語であろう。八月中頃にこの地藏尊の前で加持祈禱を行ったから、ヘチマというのであろう。<sup>(16)</sup>

(オ) 深谷市国済寺・国済寺（臨濟宗）

書院の棚の上に丸彫り、円頂、座高十数センチ、小体の地藏を六体一列に並べて安置する。いずれを見ても頭中をかぶり、衣装を着、きわめて長大の帯をしめ、小形の厚地のざぶとんの上に座している。一見して節句の雛人形に似ている。この名を巡行地藏の御留守居六地藏と呼ぶ。願主尊はいつも巡行中にして、毎月二十三日にだけ寺に帰る。つねに付近の檀家を巡行しているのである。<sup>(17)</sup>

(カ) 本庄市北堀・清福寺（真言宗）

本尊は大日如来、寺歴は不明、本堂の東に隣る別堂内に素彫り、一本作り、円頂、立高三十二センチ、双手を前にして童子を抱く子育て地藏尊を安置する。六字唱名を法衣に墨書し、かつ背部には、「甲州山梨郡萩原村寛政四年四月吉祥日木食日勝作云々」と墨書する。その傍に簡単な小像を置く。この神輿の内に石の子育地藏を奉安して、北堀付近の四つの小部落の檀家を次々と巡行してその日の暮方に寺に帰る。以前には七月二十三日に地藏会を行ったが、今は八月二十三日にこれを行う。<sup>(18)</sup>

以上のうち(ア)は県央部に位置し、(イ)は東南部に位置するほかは全て県北の事例であり、県内に「拠点」を置く廻り地藏分布の一つの傾向性を示唆しているといえる。また、六ヶ寺の巡行地藏のうち子育て地藏なる名を持つものは三例あったが、疫病除けに関する記述は三好の著書には見られなかった。また、毎月二十三日、あるいは八月二十三日だけ戻るといふ事例が二つ、八月二十三日だけ廻るといふのが一例であった。一集落内にとどまらずそれなりに広範な地域を廻るものとしては、(エ)安養院、(オ)国済寺、(カ)清福寺のものと三例確認できた。(ア)と(イ)の二例は、比較的早い段階で習俗が途絶えてしまったようであるが、このうち(ア)北本市・多聞寺の事例は、習俗を維持できなかったからという理由からではなく、むしろ信仰心の篤さ故に寺院に安置するようになったとのことで、積極的理由によって祀る形態を変えた珍しい事例といえる。なお、(エ)深谷市・安養院の巡行地藏について三好は、

#### 41 埼玉県下の廻り地蔵

番号	現市町村名	行事名(別名)	所在地	行事日	行事の中心になる場所	道具立て・用具類
1	熊谷市	今井の廻り地蔵(別名)地蔵様のお廻り	熊谷市今井新井	1月16日、8月16日(もと)旧暦1月16日、7月16日	浄業庵	延命地蔵、厨子、御守、笈、太鼓、鉦
2	加須市	地蔵会	加須市馬内字上川面	8月23日	諏訪社の別当延命寺	地蔵尊
3	本庄市	地蔵様	本庄市北堀	農休み(7月前半)	各自治会館	神輿
◎4	所沢市	和泉の地蔵	所沢市	各講によって異なる(夏・秋頃)	曹洞宗 泉龍寺	木造の子安地蔵、厨子
◎5	羽生市	廻り地蔵	羽生市本川俣	1年中	真言宗 千手院	高さ45cmの木彫地蔵、厨子
◎6	入間市	廻り地蔵	入間市	秋祭りのころ	曹洞宗 泉龍寺	子育地蔵、厨子、手車
◎7	新座市	地蔵様	新座市中野	8月頃		地蔵様の掛け軸、木の箱
◎8	坂戸市	世田谷の廻り地蔵(一晩地蔵・背負い地蔵)	坂戸市	12月から2月にかけての農閑期	曹洞宗 泉龍寺	高さ30cm程の子供を抱いた子育て地蔵、厨子
◎9	ふじみ野市	イナゲの地蔵	上福岡市	年1回春か秋	曹洞宗 真福寺	子育地蔵、厨子、手車、リヤカー

表 廻り地蔵一覧(『無形民俗文化財調査事業「巡り・廻り」の民俗行事」総括報告書Ⅰ』による)。

石像としているが木彫りの立像であり、祀られているのは地王堂ではなく、地蔵堂である。

#### (2) 埼玉県立歴史と民俗の博物館の報告から

表の廻り地蔵一覧と、それに対応する廻り地蔵分布図を御覧いただきたい。これは、「埼玉県の祭り・行事」基礎調査票をもとに作成したとことで、筆者が関心を持つ深谷市・安養院や国済寺の事例、榎本が報告した比企郡吉見町のもの等は見当たらない。そのことはともかくとして、ここでは県南部および県中部に目を注ぎたい。この分布図について、戸邊は次のように解説している。<sup>19)</sup>

県北の廻り地蔵が地蔵祭りに関連し、基本的に集落で完結するのに対し、県南では講行事として行われ、集落から集落へと巡っていくものが多い。所沢市や入間市、坂戸市などでは、春や秋の季節、地蔵講が泉龍寺(東京都狛江市和泉)から地蔵を借りてきて、講中から講中へ、すなわち集落から集落へと廻っていた。呼び名は「和泉の地蔵」、「世田谷の廻り地蔵」など様々だが、いずれも「子安地蔵」、「子育地蔵」として信仰され、昭和一〇年代まで盛んに行われていたようであ

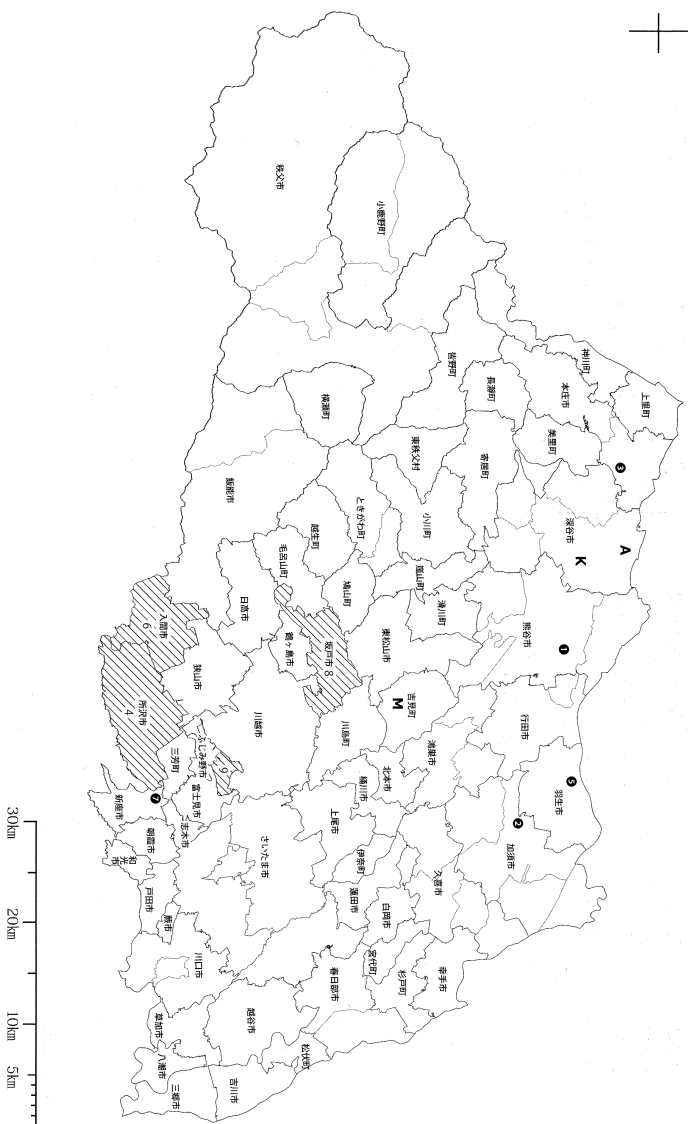
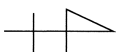


図 廻り地蔵分布図〔無形民俗文化財調査事業「巡り・廻りの民俗行事」総括報告書Ⅰ〕による。

注(1) ●…廻り地蔵実施地、▨…集落を越えて廻り地蔵を行う地域。

注(2) A (安養院の廻り地蔵)、K (国済寺の廻り地蔵)、M (無量時の廻り地蔵) は筆者が加えたものである。



る。また、現在のふじみ野市に当たる地域では、春や秋に真福寺（神奈川県横浜市港北区）の子育地蔵を借りてきて、集落から集落へと廻していた。「イナゲの地蔵」と呼ばれらこの行事は現在の富士見市や川越市にもまたがって昭和一〇年代まで行われていた。講として行われた和泉の地蔵やイナゲの地蔵は、埼玉県南だけではなく、東京都や神奈川に広い信仰圏を形成していた。子授けや子育ての霊験あらたかな地蔵を集落から集落へと廻す例は、今井の廻り地蔵にも共通する。

これによって埼玉県下のおよその状況が理解できる。さて、県南部の地域へは、県境を越えて東京や横浜から廻り地蔵がやって来ていたようで、一種の流行神として広がりを見せ、戦前に消滅したようである。三好の『武蔵野の地蔵尊〜都内編〜』にも、泉龍寺の巡行地蔵のことは書かれていたが、埼玉関連の記述が見られないことから割愛した。埼玉県下の市町村史にも、泉龍寺や真福寺関連の記述はあるものの、県境を越えているためか、簡単な記述で留まっている。幸い中島恵子が執筆した『狛江市の巡行仏』が手許にあることから、同書に導かれて泉龍寺の廻り地蔵を中心に県南部の実態を確認したい。合わせて、一つの集落内で完結する新座市中野の廻り地蔵も次節で取り上げてみたい。

### 三、県南部の廻り地蔵

#### (1) 泉龍寺（曹洞宗）と真福寺（曹洞宗）の廻り地蔵

東京都狛江市和泉にある泉龍寺は、藤沢市遠藤の曹洞宗宝泉寺の末寺で、本尊の釈迦如来の下壇に厨子に入った延命子安地蔵尊を祀っている。地蔵尊は左手に小児を抱いた木像の坐像で通称は子育地蔵。この地蔵尊は江戸中期から昭和十七年（一九四二）頃まで、近郷・近在の信者の間を巡行していた。『新編武蔵風土記稿』巻之

## 一二七「泉龍寺」の条に

本尊釈迦木の坐像一尺余なるを安せり、この外に地蔵一軀あり、これは木の坐像台座共一尺五寸許、厨子に入たり、安永年中より近村の民信心のあまり、この像を己が宅へうつして祈念せしことありしに、其しるしありしかば伝へき、今は江戸にても己々が家へ迎へて祈念せり、されば月の二十三日といへるはこゝへ帰るのみにて、其他は都鄙を巡行せりと、

このように記されており、<sup>(22)</sup>巡行の始まりは安永年間（一七七二〜八二）となっている。しかしながら中島によれば、泉龍寺境内の弁財天池の石橋に、「宝暦一壬<sup>申</sup>年仲冬吉日 願主上祖師谷村吉岡宗七郎」「廻地蔵尊以賽錢物此石橋修造者也」と刻まれており、安永年中より以前の宝暦二年（一七五二）には、既に近村を巡行し、信仰を集めていた地蔵尊であることが知られる。<sup>(23)</sup>

泉龍寺の廻り地蔵は毎月一回寺院に戻るといふ形のもので、月の二十五日から翌二十二日まで巡行し、二十三日には泉龍寺に送り込み、二十四日が縁日となる。泉龍寺近在に住む明治三、四十年代生まれの人達の記憶には、砂川・小川・立川・村山・山口・狭山・所沢・練馬・十条・赤羽などの講中の名が残っているという。<sup>(24)</sup>これに対応するように、『所沢市史 民俗編』「和泉のまわり地蔵」の頃には、次のように報告されている。<sup>(25)</sup>

和泉（東京都狛江市）の泉龍寺の子安地蔵は、戦前まで、東京各地や埼玉県西部を巡行し広い信仰を集めていた。それは「まわり地蔵」または「和泉の地蔵」と呼ばれていた。地蔵の巡行は、講を単位として行われ、講は講元を中心として地蔵が巡行する村が数カ村ないし、十数カ村で構成されていた。（中略）かつては市内の三ヶ島地区（林・糞谷・中村・表・堀之内）が宮寺講中、久米・上新井が小川・砂川講中の傘下にあり、山口地区を

中心に山口講中、所沢町を中心として所沢講中が結成されていた。

各講の成立時期については明確ではないが、泉龍寺に残る記録によると、文久二年（一八六二）に所沢講中の名が現れ、その後幕末から明治にかけて講が拡大していったと推定される。特に所沢講中は、巡行地域が所沢町のみではなく、明治三十年（一八九七）の「延命子安地藏尊掌故」によると、高萩村（入間郡日高町）や鶴ヶ島（入間郡鶴ヶ島）、精明村、加治村（飯能市）、柏原村（狭山市）、坂戸町（坂戸市）に世話人の名が記されており、それらの地域にもまわり地藏が巡行したと考えられる。

これによって、所沢講中が広範な地域をカバーしていることがわかる。小川・砂川講傘下の地域、山口講に属する地域は所沢市の比較的数少ない集落がかかわっていたにすぎないように思われる。一方宮寺講であるが、狛江市和泉周辺の老人達がいうところの「狭山」なる講中に相当し、所沢よりも入間の集落が数多く加わっており、最盛期には巡行は三十六ヶ村に及んだと言われている。以下、中島の報告を整理する形で話を進める。

宮寺講ができたのは天明（一七八一〜八九）の飢饉後と伝えており、疫病が流行り小ヶ谷戸村や矢寺村で子供が大勢亡くなったことから、小ヶ谷戸村の名主・原島市兵衛が中心となり、当時盛んであった泉龍寺の子育地藏を迎えるようにしたという。昭和十三年（一九三八）の宮寺講中人名簿によると、講員数はおよそ四百名。その内訳は次の通りである。○内の数字は大正十四年（一九二五）のものである。

三ヶ島村（所沢市）≡林31（31）・表14（19）・糞谷19・中村15（23）・堀之内19

金子村（入間市）≡南峯14（15）・寺竹20・上ヶヶ貫16（17）・下ヶヶ貫22（27）・西三ツ木14（16）

東金子村（入間市）≡上小谷田17・下小谷田15

宮寺村（入間市）≡矢萩26（18）・小ヶヶ谷戸23（16）

元狭山村（入間市）≡栗原10・二本木27

豊岡町（入間市）＝扇町屋 8

藤沢村（入間市）＝上藤沢 28（26）

霞村（青梅市）＝七日市場藤橋 12（13）

長岡村（青梅市）＝長岡 40

各講中には、世話人が一人から二人、そのまとめ役として宮寺村小ヶ谷戸に講元一人、三ヶ島村の堀之内に副講元を一人置いた。講元と副講元は世襲である。宮寺講中の巡行は、八月二十五日から九月二十二日までである。八月二十五日に寺を朝四時頃出たお地蔵さんは、寺の男衆二人の引く車に乗せられて（明治末までは厨子に入れて背負って運んでいた）、講元の家に昼前に到着する。九星の紋のある箱には、お地蔵さんと一緒にお礼も入っている。

この日の宿は講元の家がする。奥座敷の床の間などに幕を張り、お地蔵さんを据え、蠟燭や線香などを立ててお茶やうどんを供える。お地蔵さんが到着すると鉦を叩いて知らせた。集落の者が次から次へとおまいに来てお賽銭をあげる。子供も大勢集まってきて菓子などもらった。夕方近くなると、「ひとまわりして来いや」などといわれて、一〇人くらいの子供たちがめいめい、赤・黄・紫・白などの布に「延命子安地藏尊」と書いた旗を立てて行列を作り、一人が鉦を叩いて集落を触れてまわる。講中に入っていないなくても、妊婦や子供の欲しい人、子供が弱い家の人などはおまいに来る。

二十五日は夕方から講元の家で飲み講があった。お地蔵さんの巡行に関する様々なことを決めるささやかな宴会を、このあたりではおもに飲み講といっていたという。飲み講には、講元や副講元、それに各講中から都合のつく世話人が集まって、上（西）廻り、下（東）廻りなどその年の巡行順序を決めた。宿の家などもこのとき定まる。宿は世話人もしくは希望者の家で、集落によっては二ヶ所泊ることもあったが、どの家でも一泊限りである。「二晩泊めるとお地蔵さんが泣く」といって、必ず一晩だった。昭和十六年（一九四一）には「時節柄」人数

を減らし、講中を四つに分けてその四地域から代参各一名を選び、講元、それに車を引く者二人で送り込んだ。宮寺講中への最後の巡行は昭和十七年（一九四三）で、その後講中も解散した。<sup>26</sup>

泉龍寺の子安（子育て）地蔵の場合、その巡廻範囲は測り知れない。疫病の流行や霊験の喧伝に伴って拡大したと思われる。しかし拡大するといっても、無原則に広がる訳ではなく、一日ずつ止宿しながら約一ヶ月のうち廻れる範囲一二地区を最大範囲とする。実際最盛期には一〇地区に及んだ模様である。宮寺講中の範囲は、ちょうど一ヶ月かけて巡廻する地区範囲の一つの目安となる。交通・交易路に沿って、いくつかの生活圏が連鎖する形で、それなりにまとまりのある地域が形成されたことになる。この種の流行神には流行りすたれはつきものだが、埼玉方面への巡廻は昭和十七年（一九四二）あたりで止絶えた。理由は多々あるが、一五年も続く戦争が災いした点は否めない。

一方ふじみ野市や川越市域まで廻って来ていた横浜市港北区下田町・真福寺の廻り地蔵であるが、『新編武蔵風土記稿』巻之六五「真福寺」の条に

子安地蔵を安ず、坐像にして長六寸作知らず 惣体黒塗にして玉眼の像、この像は相州一の沢彈誓上人の守仏にして霊像なり久しく爰に安置せしが寛延三年の頃より遠近の人大に崇信して屢靈験聞えありければ、農民等子孫の繁栄を祈んがため一夜づ、宿して祈念しけり このこと遠近にきこへて近き頃は四月より七月までの間は江戸の中央及び近郷を廻り、各一夜づ、を宿して後は寺へかへり本堂に安ず、故に俗に一夜地蔵と呼り

とある。<sup>27</sup> 真福寺は泉龍寺の末寺であるが、ここでの廻り地蔵は所在地名をとって「下田の地蔵」あるいは「イナゲの地蔵」と呼ばれていた。埼玉県下では後者名で呼んでいたが、それは旧地名が橘樹郡駒ヶ橋村下田で、同村が稲毛領だったことにちなむという。イナゲの廻り地蔵も、町田市、大和市、藤沢市等神奈川県内は昭和四十二年

頃まで巡廻していたものの、多くは昭和十年代に止絶えたという。<sup>(28)</sup>

## (2) 新座市中野の廻り地蔵

中野は柳瀬川の西岸に位置し、川越街道が南東から北西へ縦貫し、街道沿いに屋敷が散在している。『新編武蔵風土記稿』には大和田村の小名として記されている。現在は一丁目と二丁目から成る。<sup>(29)</sup> さて、その中野の廻り地蔵について、『新座市史 第四巻民俗編』は次のように記している。<sup>(30)</sup>

中野には「子育て地蔵」と呼ばれているまわり地蔵がある。まわり地蔵といっても石仏の地蔵をまわしているのではない。鉦や巻物の軸の入った箱を、念仏講四五戸の間で一カ月毎に順にまわっていく。月二四日の当たり日には、軸をかざりお参りする。鉦は古くから念仏講中で使われているもので、明和元年（一七六四）武州入間郡中野村念仏講中と記されている。また軸の箱には天保十一年（一八四〇）中野宿と書かれているが、中の軸は修理や書きかえを行っている。

鉦や軸を入れる箱の中に、鉦の下に敷く小さい布団がたくさん納められている。子どもができた人が子供の名前を布団に印し、丈夫に育つように祈願して納めたのである。家にまわってくると、子供達も手を合わせて拜む。いつ頃から子育て地蔵と呼ばれるようになったかは不明である。現在でも中野の家々で子育て地蔵としてまつられ、一カ月ごとに各家をまわっている。

所沢市、入間市そして坂戸市といった地域を巡廻する泉龍寺の廻り地蔵、さらにはふじみ野市、富士見市、川越市といった地域を巡廻する真福寺（イナゲ）の廻り地蔵は、すなわち県南部を中心に分布するものは、いずれ県境を越えてやって来るもので、多数の講組織がかかわって、広範な地域をめぐるものであった。二つの寺院の廻

り地藏はいずれも子安（子育）地藏で、近世後期から近代初頭に流行し、昭和十年代に消滅した。なお、泉龍寺とかかわる人間市、所沢市にかけての地域に結成された宮寺講中は、天明（二七八―二八九）の飢饉後の疫病流行にかかわって子育地藏を迎えたものであった。その点を確認しておきたい。

一方今紹介した所沢市中野の廻り地藏は掛軸を念仏講中に廻し、講の当り日に祀るというもので、一つの集落内で完結するものであった。歴史的には天保十一年（一八四〇）まで廻れるようである。以前、熊谷市中条の甲子講中に講宿で祀られる廻り大黒に触れた際、さまざま講や宮座の中には、頭屋や講宿を順番に廻して祀るものは多々あると指摘したが<sup>(31)</sup>、中野の廻り地藏もそうしたものの一例にはかならない。

#### 四、県北部の廻り地藏

ここでは、報告例がほとんど見当たらない深谷市・安養院と、加持祈祷や占いかかわる同市・国済寺の廻り地藏を取り上げる。

##### (1) 深谷市・国済寺（臨済宗）の廻り地藏

国済寺は唐沢川右岸の台地に位置する。当地は深谷上杉氏の祖・憲英が居館を構えた場所<sup>(32)</sup>で、康永二年（一三四三）に憲英が建立した国済寺（臨済宗）が地名の由来と伝える。この国済寺の廻り地藏について大島は次のように報告している<sup>(33)</sup>。

先達のお話によると、いつの頃か、この地の殿様が、「こんなものいけてしまえ」というので、土の中に埋めてしまった。国済寺の人が、つきつきに死ぬので、法華にうかがったところ、そのあたりであるとわかった。そ

ここで、ふたたび掘り出されて、この寺にまつられたものという。今日では、本堂の左隅に、そのための一間が設けられている。ただし、肝心の地蔵は、御縁日にそこにもどってくるだけで、ふだんは近在をまわっている。

先に触れた三好の報告には、巡行中の願主尊のほか「お留守居六地藏」とあったが、大島のいう「お弟子」は七体であり、その数が異なる。現在の国済寺の様相をみると、地蔵は本堂内陣の、本尊に向かって左側の二段の棚に安置されている。上段にあるのは八体で、像高はそれぞれ一〇〜一五センチほど、幾重にも布（衣裳）が被せられているので正確には不明だが、坐像と推察される。下段には二体の木彫りの地蔵があり、像高は二体とも台座を含めて一尺ほどで、それぞれ厨子に納められている。住職によれば、今廻っているものもあるとのこと。ちなみに、住職の言からは、寺院側は廻り地蔵にかかわっておらず、檀徒を含むメンバーによって構成された組織が実施しているものと推察される。いずれにしても、大島によれば国済寺の地蔵は、二つの経路によって講中を廻っていたという。すなわち奇数の月は、熊谷、田中、吉見、松山、万台というように、熊谷市東部から吉見町を経て東松山市に至るルート、偶数月には熊谷市西部の一带、すなわち三ヶ尻、（大麻生の）上川原、下郷、屋敷、広瀬久保島等のルートである。<sup>34</sup>各径路には地区毎に世話人がいて（先達と称している）、初めの世話人だけが国済寺の人が務める（これを大先達と称している）。廻り地蔵は前の世話人から受け取って、自分の家に泊め、地区の家々を廻ってから次の世話人に送って行く。

中村によれば、久保島における祀り方は次のごとくであった。<sup>35</sup>

巡廻の方法は、前の人が昼頃までに次の人の家まで本尊と賽銭箱を持って行き、申し送りをする。地蔵尊を申し受けた人は、床の間にすえ準備してあつた精進料理と家によって団子や赤飯を作る人もあると言う。それぞれお供えし、燈明をともし線香を上げ、真言を唱えてお祈りする。又是非のお伺いの時も真言を唱えてお伺



いし、線香を上げるのである。お伺いの立てられない人には、其の地区の世話人がお伺いを立てて下さる。そう  
で、私が最初に訪ねたA家で、篠塚さん（この地区の世話人＝筆者註）がお伺いを立てている時に会い、又其の  
時御主人が自動車事故で入院したと通報があり早速お伺いを立てたら命に別状はないが、一ヶ月はかかるとお  
告げがあったが、後日聞いたら、外科病院で一ヶ月と言われたとの由である。各家庭を巡行した地藏尊は、月  
の二十三日に国済寺にお帰りになる。其の夜は先達及世話人を始め、信者一同お寺に参り、大法要が行われる。  
此の人達の大半は大昔からの信者であつて祖父から父へ、そして子どもへと引きつがれて来た信者である。

どうやら国済寺の廻り地藏は、吉凶や願い事が叶うか否かを問うお伺いに主眼が置かれていたようである。お伺  
いの方法には、両手で持ち上げるものと、右手と左手にて交互に持ち上げるものと二通りあるようだが、いずれ  
にしてもその占い方法は「重軽様」そのものである。また、熊谷市広瀬のクルワ内を廻っている地藏には国済寺  
の末寺・円福寺のものもあつて安産や病氣平癒祈願の対象として信仰されており、やはりお伺いが伴っている。  
大島の許に寄せられた熊谷市広瀬在住の今泉清治の報告には次のように記されていたといふ。<sup>(36)</sup>

（前略）お地藏様がお宿へ泊つた夜は、その宿の主婦は祭司者としての権利を保持し、「占い」をするのが一般  
的である。占いは別称「おうかがい」とも云い、願ひ事の首尾、不首尾を占うものである。この場合呪術者は  
「ないぞう、く」（南無阿弥陀仏）と唱え神がかり状態になり、願ひ事が成就するときは地藏様が軽く持ちあが  
り、不首尾のときは微動だにしないといふことである。幼い頃、老母や母が何をねぎごとしたかは不明だが、憑  
依現象を起こしている状態を不思議な気持ちで傍観していた記憶もある（後略）

国済寺の廻り地藏の場合、お伺いを立てるのはそれなりの資質を持つた人か世話人となつていたが、ここでは

もつばら主婦に限られていたようである。しかもトランス状態に入っていたということで、時代的に古い報告例とはいえ、大変興味深い。

ちなみに、熊谷市今井の廻り地蔵についても、「重軽様」同様の占いが行われていたことが、三田村や内田の報告にも簡単に触れられている。<sup>(37)</sup>

国済寺関連寺院、あるいは熊谷市内の廻り地蔵に限って「お伺い」と称する占いが存在する理由は不明である。つけ加えるならば、東京都台東区上野・寛永寺（天台宗）の塔頭の一つの浄名院の巡行地蔵も「伺い地蔵」として知られており、それについては林京子が報告している。林によれば、浄名院の巡行地蔵は石占（お伺い＝筆者註）に使われながら、都内や横浜方面の信者の間を廻っていた。この地蔵は明治十二年（一八七九）に妙蓮が、仏恩に報い民衆を救うために八万四千体の石像地蔵尊の建立を発願したが、巡行はその一行だという。なお林によれば、浄名院では筆者が次に取り上げる高島・安養院のそれと同様にへちま加持が実施されており、喘息を中心とする病氣平癒がその目的で、執行日は旧暦八月十五日だという。浄名院の行事と埼玉県下のものが（「お伺い」を含めて）関連するかどうかは不明だが、念のために記しておきたい。<sup>(38)</sup>

この加持祈禱を主導したのは「地蔵比丘妙蓮」という明治期の僧侶で、妙蓮が「朝夕に来て頼みなば、皆人の四百四病の苦をや救はん、南無地蔵大菩薩」と唱えつつ病に苦しむ人を救うためへちま加持という祈禱を行ったものが、現在も続いているという。浄名院境内にはへちまを持った巨大なへちま地蔵があり、祭日当日参詣者は「伺い堂」と呼ばれる堂舎で受付をして、一人ひとり加持をしていただき護符や病を切る飴を授与される。

## (2) 深谷市・安養院（真言宗）の巡行地蔵

安養院がある高島は、利根川と小山川に挟まれた低地に位置する。「シマ」には田のある所と村との二つの意味があり、当地名は低地の中にある高い集落という意味から起きたものとされている。<sup>(39)</sup> また『新編武蔵風土記稿』



写真(1) 高島・安養院の巡行地蔵 (2022年7月31日撮影)

卷二百三十一、「高島村」の条に「永祿の頃は村の南を利根川通じて、當村は上野國に属せしにや」とあって<sup>(40)</sup>上州(群馬県)とのつながりを示唆している。ちなみに高島の巡行地蔵は、利根川が氾濫した折に寺前に漂着したのを里人が拾いあげたもので、安養院で行われるへちま加持にちなみ「おへち巡行地蔵」とも「雨乞い地蔵」とも称された。今日安養院では、へちま加持は実施していないが、上高島地区だけは夏祭りに合わせて地蔵を巡行させている。

上高島は現在九〇戸、八班編成である。月番が地蔵の巡行を担当するが、年度末に行事の規模に応じて月番の人数を決めている。地蔵の巡行行事担当者は五名である。コロナ禍の期間はリヤカーによる地蔵の巡行をとりやめ、七月の最終日曜日の午前八時に月番が集まり、地蔵堂の清掃を行い、八時半から住職に祈祷をしてもらおう。

その間三々五々参詣者が訪れる。その後、月番が手分けして「武州高島安養院」と記した地蔵の御影(お札)と御供を各家に配る。それだけで終了する。

かつては他地区からも地蔵を借りに来る所もあった。他地区はそれぞれ日をずらして巡行を行っていた。しかし、昭和四七、八年には産業構造や価値観の変化から他地区は巡行をやめてしまった。上高島地区では、「せっかく今までやって来た行事なのだから、このまま続けよう」ということになった。但し、サラーマン層が多くなったことから、日曜日に日を変え、水天宮の祭りと合わせて行うべく、七月の最終日曜日に実施することに決定した。オウコに鉦を

吊して二人で担ぎ、鉦を叩きながら「ご利益がありますよ」と言って地蔵を先導する。各家の玄関で拜んでもらい、その時お礼と御供を渡していた。お札は仏様に一年間供えするという。かつては、子供会が中心となって地蔵堂前広場でヤキソバを焼いたりスイカを食べるなどして賑やかしたという。また、夜は子供達がトウロウを灯し、風情があったという。

地区の人々は、雨乞地蔵の名称を持つことは承知しているが、ご利益については特定のものを口にするとはなかった。一般にヒウチと称される三角袋が地蔵尊の厨子に吊り下げられており、これは言うまでもなく各家で



写真(2) 高島・安養院の地藏堂 (2022年7月31日撮影)



写真(3) 地藏堂における祈祷風景 (同上)

こしらえて奉納したものである。この三角袋の用途は多様で災厄除けの機能がある等々のことが言われているが、後ほど紹介する由来の事例からこの地域における機能は、祈願に際してご利益のあるものを借りて満願寺に倍返しするという、「あやかり」にかかわる奉納物であることが判明する。

ところで三好の報告には、「村人たちはこれをお厨子の中に納め、これを担いで尾島や、南岸の石塚、由良、登戸などという村々を巡行する」と記されている<sup>(4)</sup>。ここにある尾島、由良はそれぞれ旧尾島町、旧宝泉村（現群馬県太田市）に属し、利根川の北岸にある。また石塚と登戸は深谷市に属し、高島に隣接する、ともあれ、由良における実態だけは何とか判明した。由良は、群馬県新田郡旧宝泉村（現太田市）の在所であり、昭和五十一年（一九七六）年刊の『新田郡宝泉村誌』に「地藏まわし」の項があつて、高島の地藏堂から借り受けて集落内を廻っていた様子が記されている。そのあらまは次のようなものであつた。

借りに出向いたのは三月二十四日で、釜番（世話役）八名が地藏様をケヤキの箱に入れて交代で担いできた。最盛期には八〇人もがぞろぞろ出かけたこともあつた。このように歩いて借りてくる形が、やがてリヤカーを用いさらには自動車で運ぶようになつた。借りてきた地藏様は世話人の家にとめておき、宿の順番を決めた。由良には六つのクルワがあり、一つのクルワに一晩ずつ泊めた。子供のいない家では、地藏様を特別に借りて泊めることもあつた。地藏様を宿から担ぎ出し、鉦をカンクと叩きながらクルワ内の各家を廻つた。地藏様を担いだのは、それぞれのクルワ内の信心のものであつた。担ぐのは前と後ろの二人で、これをさし担ぎといつた。各家の廻り方は特に決まっておらず、都合の良いように廻つた。地藏が廻る街道筋の人たちは、布でつくつたお守りを借りた。これを翌年に倍にして返した。どこか体の具合悪い場合には、たとえば腹が悪ければ地藏様の腹をなでてから自分の腹をなせば良いといつた。また、地藏様を抱えて寝れば子どもができるといつた。返しに行くのは四月一日で、この時は赤飯をふかして持つて行つたが、信仰者も何人かついて行つた。ちなみ

に地藏様の往復のコースは、鳥谷戸―中根―下田島―尾島―前島―二ツ小屋―利根川であり、利根川を渡る時はふだんは船銭をとられたものの、地藏様の場合は無料であった。この行事は、いつ頃始まったかは不明である。明治の初め頃中止したなら悪病が流行したので、再びするようになったという。昭和四十七年（一九七二）まで借りてきて、廻していたとい<sup>(43)</sup>う。

この行事の起源も、やめた理由も不明というのは残念この上ないが、地藏様に限って利根川の渡し賃がただだったというのは、信仰の篤さのほどが知れて興味深い。なお、雨乞い信仰との関連が確認できなかったものの、三角袋（ヒウチ）の取扱いから子授け、子育てに加えて病氣治しに効験のある地藏として信仰されていたことがわかる。一旦止めたら疫病が流行したので再開したというのは、民俗行事継続の理由としてすこぶる典型的である。蛇行と流路の変化が著しい利根川の対岸同士は、複雑な行政区画とその変更にかかわらず、文化面の交流が盛んであったようである。世良田（現太田市）・八坂神社のお獅子様を埼玉県北部地域に貸し出していたり、逆に加須市騎西・玉敷神社のお獅子様が利根川を越えて出向していたのがその一例である<sup>(44)</sup>。これと同じように、高島の巡行地藏も小範囲ながら利根川対岸地域を廻っていたことを確認することができた。

### 結びにかえて

以上、埼玉県下の廻り地藏について既報告書・論文や史資料を中心としつつ確認調査を加えて、その実態について報告した。これを踏まえて歴史・由来、ご利益、その分布と廻り習俗の特徴を整理すると以下のごとくである。

史資料やその墨書銘から、その歴史・由来の判明しているものがいくつかあった。羽生市川俣・千手院の廻り

地藏の胎内の墨書及び文書から、浅草・宗圓寺の松阿上人が自身の関係者と本川俣村の安寧を願い、宝暦三年（二七五三）に廻り地藏を作ったことがわかる。これが県下の廻り地藏に関する最も古い史料である。なおその由来については、このほか本川俣で倒れた巡礼者を弔うために、持ち物の筈に地藏を納めて一年を通して家々を廻らせるようにした、あるいは、地藏を持つ女性が一軒ずつ泊り歩いていた、流れて来た地藏像を家々で廻すようにした等々多様な伝承があるという。<sup>43</sup>

ちなみに、吉見町久保田・無量寺の廻り地藏については、先に触れたように明和四年（二七六七）銘の「順廻地藏一札の事」なる史料があり、これによって当時既に廻り地藏が存在していたことが知られる。なお、この地藏は無量寺で亡くなった廻国の六部が背負っていたものと伝えられていた。歴史的古さでこれらに次ぐのは、天明（一七八一〜八九）の飢饉に伴う疫病流行を契機として、泉龍寺の廻り地藏を受け入れた、入間市・所沢市等を範囲とする宮寺講である。さらには、新座市中村の地藏の絵像を納める箱には天保十一年（一八四四）の銘があった。さらには、熊谷市・今井の廻り地藏の背負厨子には、嘉永元年（一八四八）の墨書銘が認められた。しかも、これは信州からやって来た僧侶がもたらしたものである。<sup>44</sup>

以上の事から、近世の半ば頃から幕末期にかけて始められたものが目立つ。また、漂着した仏と伝えられているもののほか、六部等遊行的宗教者によってもたらされたものというのも数例認められた。いずれにしても由来・縁起としては、廻り地藏に限らずその他の神仏にも広く認められる内容のものである。

なお、多くの廻り地藏は寺院や堂宇に安置されていて、毎月二十三日の縁日や地藏祭りの折に戻るというものであった。そうしてその中には、寺院が中心となつて廻り地藏を管理・運営するものがある一方、寺院とは多少距離をおいた講組織や地区の人々が主体となるものも多く、羽生市川俣のように寺院が集落内の家々の一つに位置付けられている場合さえあった。廻り地藏は、カミ遊行の仏教版の一つにはかならないが、こうしてみると仏教の民俗化と民俗の仏教化とが交錯する中で培われた習俗といえる。



ちなみに、そのご利益のほとんどは子授け、子育てであり、加えて疫病除け、病氣平癒というのも少なくなかった。深谷市国済寺、熊谷市広瀬、同市今井の廻り地蔵に関していえば「お伺い」と称する「重軽様」同様の石占をベースにしたもので、県内では北部にのみ存在する特異なものといえる。

廻りの習俗についてみると、現在では巡廻範囲が一集落の範囲でとどまっているものの、その多くは、かつては広く周辺集落に貸し出していたことがわかる。深谷市高島の廻り地蔵は利根川を越えて群馬県内まで足を伸ばし、同市国済寺のそれは北は熊谷市全域を廻り、東松山あたりにまで南下していた。このあたりが、泉龍寺や真福寺の勢力圏との境に相当した。言うまでもなくこの二つも広範な地域を巡廻するもので、一集落に限って廻っていたものは、羽生市川俣と新座市中村のものに限られていた。

県南部の泉龍寺や真福寺の廻り地蔵は、第二次世界大戦の影響か、昭和十年から十七年あたりまでの間に止絶えた。一方県北部の、周辺数集落まで足を伸ばしていた各地の廻り地蔵も、高度経済成長期あたりを境に、本地の集落だけを廻る形に縮小し、今日に至っている。コロナ禍でフィールドワークもままならず国済寺の運営組織や「お伺い」の現状を確認しえていない点が気かりであるが、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 松崎憲三 二〇二二「埼玉県下のお獅子様(獅子廻し)〜めぐり」のフォークロア」『民俗学研究所紀要』第四六輯 成城大学民俗学研究 所 七三〜一〇四頁。
- (2) 三田村佳子 一九九七「祭り・行事の概要」『埼玉県の祭り・行事』埼玉県立民俗文化センター 三六頁。
- (3) 戸邊優美 二〇二〇「埼玉県における巡り・廻りの民俗行事の分布」『無形民俗文化財調査事業「巡り・廻りの民俗行事」総括報告書Ⅰ』埼玉県立歴史と民俗の博物館 二二三頁。
- (4) 三好朋十 一九七五『武蔵野の地蔵尊〜武蔵野編〜』、『同 埼玉東部／川崎・横浜市編』有峰堂。



- (5) 大島建彦 一九七三「熊谷周辺の巡行仏」『西郊民俗』二六三号 西郊民俗談話会 五～一〇頁。
- (6) 中村光次 一九八〇「熊谷の巡行地藏信仰」『埼玉民俗』一〇号 埼玉民俗の会 七二～七六頁。
- (7) 三田村佳子 一九九七「熊谷市今井の廻り地藏」『埼玉県の祭り・行事』前掲書 一〇六～一二〇頁。
- (8) 三田村佳子 二〇〇〇「北埼玉の地藏祭り」『埼玉県立さきたま資料館 調査報告』第二三号 同館 六二～六三頁。
- (9) 内田幸彦 二〇二〇「今井の廻り地藏(熊谷市)」『無形民俗文化財調査事業「巡り・廻りの民俗行事」総括報告書Ⅰ』前掲書 六六～七五頁。
- (10) 戸邊優美 二〇二〇「元川侯の廻り地藏(羽生市)」『無形民俗文化財調査事業「巡り・廻りの民俗行事」総括報告書Ⅰ』前掲書 七六～八四頁。
- (11) 榎本直樹 一九八四「埼玉県比企郡吉見町久保田の巡行地藏」『西郊民俗』一〇九号 西郊民俗談話会 一四～一六頁。
- (12) 松崎憲三 一九八五『巡りのフォークロア』名著出版 七四～七五頁。
- (13) 三好朋十 一九七五『武蔵野の地藏尊』武蔵野編』前掲書 一一三頁。
- (14) 同 右 一五五頁。
- (15) 三好朋十 一九七五『武蔵野の地藏尊』埼玉県東部／川崎・横浜市編』前掲書 三三～三四頁。
- (16) 三好朋十 一九七五『武蔵野の地藏尊』武蔵野編』前掲書 一六四～一六五頁。
- (17) 同 右 一六八頁。
- (18) 同 右 二一九頁。
- (19) 戸邊優美 二〇二〇「埼玉県における巡り・廻りの民俗行事の分布」前掲論文 二三～二四頁。
- (20) 三好朋十 一九七五『武蔵野の地藏尊』都内篇』有峰堂 二二三～二三四頁。
- (21) 中島恵子 一九八七『狛江市の巡行仏』狛江市教育委員会 一～八二頁。
- (22) 蘆田伊人編 一九三三『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿十二』雄山閣 五頁。

- (23) 中島恵子 一九八七『狛江市の巡行仏』前掲書 二頁。
- (24) 同右 一二頁。
- (25) 所沢市史編さん委員会 一九八九『所沢市史 民俗編』所沢市 二八九～二九〇頁。
- (26) 中島恵子 一九八七『狛江市の巡行仏』前掲書 一五～一八頁。
- (27) 蘆田伊人編 一九三三『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿參』雄山閣 三二一頁。
- (28) 中島恵子 一九八七『狛江市の巡行仏』前掲書 四三～四七頁。
- (29) 平凡社地方資料センター 一九九三『日本歴史地名大系第一卷 埼玉県地名』平凡社 三三三頁。
- (30) 新座市教育委員会市史編さん室 一九八六『新座市史 第四卷民俗編』新座市 三一九～三二〇頁。
- (31) 松崎憲三 二〇二二『埼玉県下のお獅子様(獅子回し)めぐり』のフォークロア』前掲論文 八三～八四頁。
- (32) 竹内理三他編 一九八八『角川地名大辞典 一巻 埼玉県』吉川弘文館 三六二～三六三頁。
- (33) 大島建彦 一九七三『熊谷周辺の巡行地蔵』前掲論文 八頁。
- (34) 大島建彦 同右 九頁。
- (35) 中村光次 一九八〇『熊谷の巡行地蔵信仰』前掲論文 七三頁。
- (36) 大島建彦 一九七三『熊谷周辺の巡行地蔵』前掲論文 六頁。
- (37) 三田村佳子 一九九七『熊谷市今井の廻り地蔵』前掲論文 一〇七頁。内田幸彦 二〇二〇『今井の廻り地蔵(熊谷市)』前掲論文 六八頁。
- (38) 林京子 二〇二〇『上野浄名院の「うかがい地蔵」の巡行と『生身地蔵』』『西郊民俗』二五一号 西郊民俗説話会 六～一三頁。林京子 二〇二一『伺い地蔵』の帰還～上野浄名院の巡行地蔵のその後と岩船山高勝寺の『お尋ね地蔵』』『西郊民俗』二五五号 西郊民俗説話会 一五～二二頁。
- (39) 竹内理三他編 一九八八『角川地名大辞典一一・埼玉県』前掲書 五三一頁。
- (40) 蘆山伊人編 一九三三『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿十一』雄山閣 二四六頁。
- (41) 板橋春夫 二〇二〇『△の民俗～三角形表象論～』『青塔』三三六号 日本工業大学LCセンター。

- (42) 三好朋十 一九七五『武蔵野の地藏尊〜武蔵野編〜』前掲書 一六四頁。
- (43) 宝泉村誌編さん委員会編刊 一九七六『新田郡宝泉村誌』九〇五〜九〇八頁。
- (44) 松崎憲三 二〇二二「埼玉県下のお獅子様（獅子回し）〜めぐり〜」のフォークロア〜」前掲論文 七三〜一〇四頁。
- (45) 戸邊優美 二〇二〇「本川俣の廻り地藏（羽生市）」前掲論文 七六〜七八頁。
- (46) 内田幸彦 二〇二〇「今井の廻り地藏（熊谷市）」前掲論文 六七頁。

成城大学名誉教授

成城大学民俗学研究所元所長